

新宿・風月堂から ドーナツシヨツブまでの距離

「現代文学」と喫茶店

仲俣暁生

(文芸評論家)

作家が喫茶店で執筆するという話を聞くことがある。

一方で、日本の現代文学が喫茶店を重要な舞台としてきたのも事実。

時代時代の風俗の象徴として、また登場人物たちの喫茶店の利用法、

その場所に対し抱く感情など……。喫茶店を通して眺めれば、

文学と喫茶店、両者の変容に奇妙なリンクさえ感じられる。

近代になって日本に初めて登場した文物のうちに喫茶店（カフェ）と文学はともに含まれる。近代以前にも文学や喫茶の文化はあつたではないか、という異論に応えるならば「近代文学」と「喫茶店」と限定してもいい。

明治から大正にかけて喫茶店が文学とのような関係を切り結んでいたかを知りたければ、林哲夫の労作『喫茶店の時代』（ちくま文庫）と、林が編者となつた『喫茶店文学傑作選』（中公文

庫）を読めばその概略を知ることができる。だ

が残念なことに、前者の書名と同題の章で扱われるのは戦前昭和までの名だたる喫茶店の来歴

（青木堂、パウリスタ、中村屋、南天堂、リリオム、らんぽお、進々堂など）であり、戦後については短い一章が充てられているのみである。

『喫茶店文学傑作選』に収められている文章には、ありがたいことに戦後の喫茶店に言及したものが多い。なかでも貴重なのが『サンダカン

庫』を読めばその概略を知ることができる。だが残念なことに、前者の書名と同題の章で扱われるのは戦前昭和までの名だたる喫茶店の来歴

（青木堂、パウリスタ、中村屋、南天堂、リリオム、らんぽお、進々堂など）であり、戦後については短い一章が充てられているのみである。

『喫茶店文学傑作選』に収められている文章には、ありがたいことに戦後の喫茶店に言及したものが多い。なかでも貴重なのが『サンダカン

レスとして働いていた。

東京・新宿の「風月堂」、一九七三年の夏

時代

に閉店したからその後の世代は知っていないが、一九五〇年代から七〇年代初めまでの東京山の手の知識人層、取りわけ文学・美術・音楽・演劇・舞踊・放送・デザイン・ジャー・ナリズムなどの仕事にたずさわる男女でこの店に一度も足を踏み入れなかつたという人は、おそらくひとりもいないだろう——というふうに言われている喫茶店。新宿・三越デパートの裏手、新宿駅東口を出て、いわゆる新宿通りではなくて少し西寄りの柳並木の新宿中央通りを追分口に向かつて三分程歩くと、右側に、前面総ガラス張りのスマートな店があつた。（新宿・風月堂）

同じ世相を背景にしながら、戦前のスノップな喫茶店文化の名残を感じさせるのが獅子文六の『コーヒーと恋愛』（連載時のタイトルは『可否道』／ちくま文庫）だ。サニーデイ・サービスの曲名として取り上げられたことが機縁で復刊されたが、内容的には当時のコーヒー熱に対して、やや距離を置いたところで書かれたと思しきユーモア小説である。獅子文六自身、この小説の取材のためにコーヒーを飲み過ぎて胃腸を壊し、「コーヒーだけは、もうコリた」（『可否道』を終えて、ちくま文庫版の巻末に収録）と述べている。

この小説で注目すべきは、ドン・キホーテ的に戯画化された「可否道」の対極に、戦後の消費文化を象徴するモノとしてインスタントコーヒーが置かれていることだ。主人公の坂井モエ子は東京・荻窪に住む四三歳の女優で、「戦前に、彼女がまだ若い娘だったころから、コーヒーが好きで、喫茶店の常連だった」ような人物だ。そんな彼女は「東京のコーヒー通五人が集まつて」、ちくま文庫版の巻末に収録）と述べている。

山崎が働いていた時代の風月堂は、戦前のモダニズム文化の延長線上にあつた。しかし彼女の結婚相手となる上笙一郎が参加していた（木曜会）というグループだけは、そのなかでもやや毛色を異にしていた。詩人の三木卓や寺山修司、作曲家の林光といった他の参加メンバーを見れば、「戦後」が終わり、その次の時代が始まろうとする萌芽を見て取ることができる。



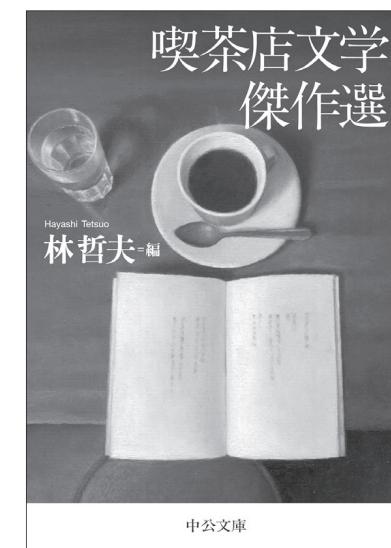
『コーヒーと恋愛』
獅子文六（ちくま文庫）

戦後の消費文化の象徴として描かれるのがインスタントコーヒー。当時のコーヒー熱にやや距離を置く。

八番娼館』で大宅壯一ノンフィクション賞を受賞した作家・山崎朋子（『サンダカン』による、新宿・風月堂についてのエッセイだ。戦前と戦後の喫茶店文化の分水嶺をどこに置くかといえば、戦後すぐに「名曲喫茶」として始まったこの店が、一九六四年の東京オリンピックを境に日本における対抗文化の拠点となつていった過程に求めるのがふさわしい。山崎はそれに先立つ一九五八年頃、風月堂でウエイト

て「結成した「可否会」のメンバーの一人であり、美味しいコーヒーを入れる名手。そんな彼女が、インスタントコーヒーの広告にかつぎ出されることが決まり、騒動が持ち上がる。「可否会」に象徴されるスノップな文化を「近代文学」に、インスタントコーヒーを戦後の「中間小説」になぞらえるなら、獅子文六自身のシンパシーの対象が後者にあることは疑えない。実際、一九七〇年代は遠藤周作や北杜夫といった中間小説の作家がインスタントコーヒーの広告に起用され、その「本格的」な味わいの保証人になった時代だった。

だが現在につながる「現代文学」は、この小説で対比されている戦前由来のスノップな喫茶店文化でもなければ、インスタントコーヒーと



『喫茶店文学傑作選』
林哲夫・編（中公文庫）
明治から昭和期の文学と喫茶店の関係がわかる。近代の日本で文学と喫茶店は共に初めて現れたと言える。